



「待たせちゃってごめんね。
大晦日の収録が長引いちゃって……」

「ううん、気にしないでよ。
そらちゃんが忙しいのは
俺もわかってるからさ」



元日。

あなたは、一人の少女を連れ立って初詣にやって来た。

彼女の名前は、ときのそら。

ホロライブを代表する人気アイドルであると同時に、あなたの幼馴染でもある。

小さい頃から深い関係にあり、思春期には多くの甘酸っぱい思い出を共有してきた。

そらの立場を考慮すれば公言するのは憚られるが、あなたと彼女は事実上の恋人関係にある。

だからこそこのことは誰にも秘密で、事務所さえも把握していなかった。

地元の人間しか寄り付かないような小さな神社で
あなた達は初詣を済ませた。

そしてその帰り道――

あなたは、言おうか言うまいか迷っていたことを
思い切って切り出した。

下心が表情に出ないように気をつけながら、

「あ、あのさ、そらちゃん……よかったら今夜は、俺の家に来ない？」

「えっと……ごめんなさい。今夜もお仕事の予定が入ってるの」

「あ、そ、そっか！ そうだよな……うん、わかったよ。それよりさ――」

気まずい空気になりかけたのを払拭するべく、あなたはすぐに話題を変更した。



駄目で元々の誘いではあったが
断られるとやっぱりショックだった。

あなたは常日頃から、
自分の感情よりそらのアイドル活動を
優先すると心に決めている。

だが、どう取り繕っても淋しいものは淋しい。

そらがアイドルとして成功していくに連れて
あなたとの距離は開く一方だった。

今日のデートだって実に二ヶ月ぶりだ。

最後にセックスをしたのなんて、いったいつ以来だったろうか――

あなたはそらを駅まで送ると、一人虚しく家路に就くのだった。



「はあ、はあ……そらちゃん、そらちゃん……」

その夜、

あなたはそらの写真集やイメージビデオをオカズに
暗い部屋でシコシコとちんぽを扱っていた。

あなたには溜まり溜まった性欲を風俗で発散するという選択肢もあったが
そらという恋人がいる以上、それはよくないと考えている。
だからこそあなたはこうしてオナニーに励むしかなかった。

「うっ、ふうっ……ん？」

もう少しでイケそうというとき、
スマホの着信音が鳴り響いた。

「なんだよ、こんなときに……ってあれ？
そらちゃん？」

それは、そらからのショートメッセージだった。
タイトルには『そらシコ許可♥』と書かれていた。

首を傾げながらメッセージを開いたあなたは
その瞬間に目をひん剥いた。

「えっ……えええええええっ!？」

「そろそろそ、そらちゃん!」

そこに映っていたのは、あられもない格好で
ぎこちなく笑みを浮かべる恋人の姿だった。

着物を着崩し、おっぱいやおまんこを丸出しにしている。

股間に伸びたその細指はべっとり濡れており、
そらがナニをしていたのか、一目瞭然で理解できた。

メッセージの本文にはこう書かれていた。

『さつきはごめんね♥』

お詫びに、とっておきの画像を送るから使ってね♥

お仕事先でこっそり撮ったんだよ……すっごく興奮しちゃった♥』



あなたは驚いた。

あの清楚なそらが、
こんなメッセージを送ってくるなんて——

違和感はあったが、そんな些細な疑問は
込み上げる性欲の前に押し流されてしまった。

愛する女のこんな姿を見せられて
興奮しない男などいない。

あなたは余計なことを考えるのをやめ、
そのエロ自撮りを使って

何度も何度も自慰行為を繰り返した。

今、彼女はどこでナニをしているのか、
そんなことも知らずに——



同時刻——都内の某ラブホテルの一室にて。

「んじゅる……じゅぼぼっ
じゅぽっ♡ぐぼっ♡」

あなたの恋人は中年男の股の間に跪き、
その逸物をぱつくりと頬張っていた。

「くくく……ロでするのも随分と
上手くなったね、そらちゃんw」

男は、手に持っていた
そらのスマホをベッドに投げ捨てた。

そらは赤黒い亀頭を舐め回しながら
恨めしそうに男を見上げた。



「ひ、酷いです……
あんな写真を、彼に送るなんて……♡」

「心外だなあ。」

年明けから恋人にフラれて、
ちんぽを挿れるアテもない哀れな彼氏くん
に心ばかりのプレゼントを提供してあげただけじゃないかw

それに……本当に酷いのはどっちだ？

恋人がいるくせに他の男のちんぽを美味しそうに
しゃぶりやがって……なあ、そらちゃん？w

「うう……言わないでください……♡」

「なら、無駄口を叩いてないで奉仕を続けるんだ」

「はい……あむっ♡ んんっ、じゅるるるるるるっ♡」



この男は、ホロライブの関係者なら誰でも知っているスポンサー企業の会長だ。

その女癖の悪さは業界でも有名だった。

そんな男に、あなたとの関係がバレてしまったのがそらにとっては運の尽きだった――

恋人がいるなんて世間に知られればアイドル人生の終わりだ。

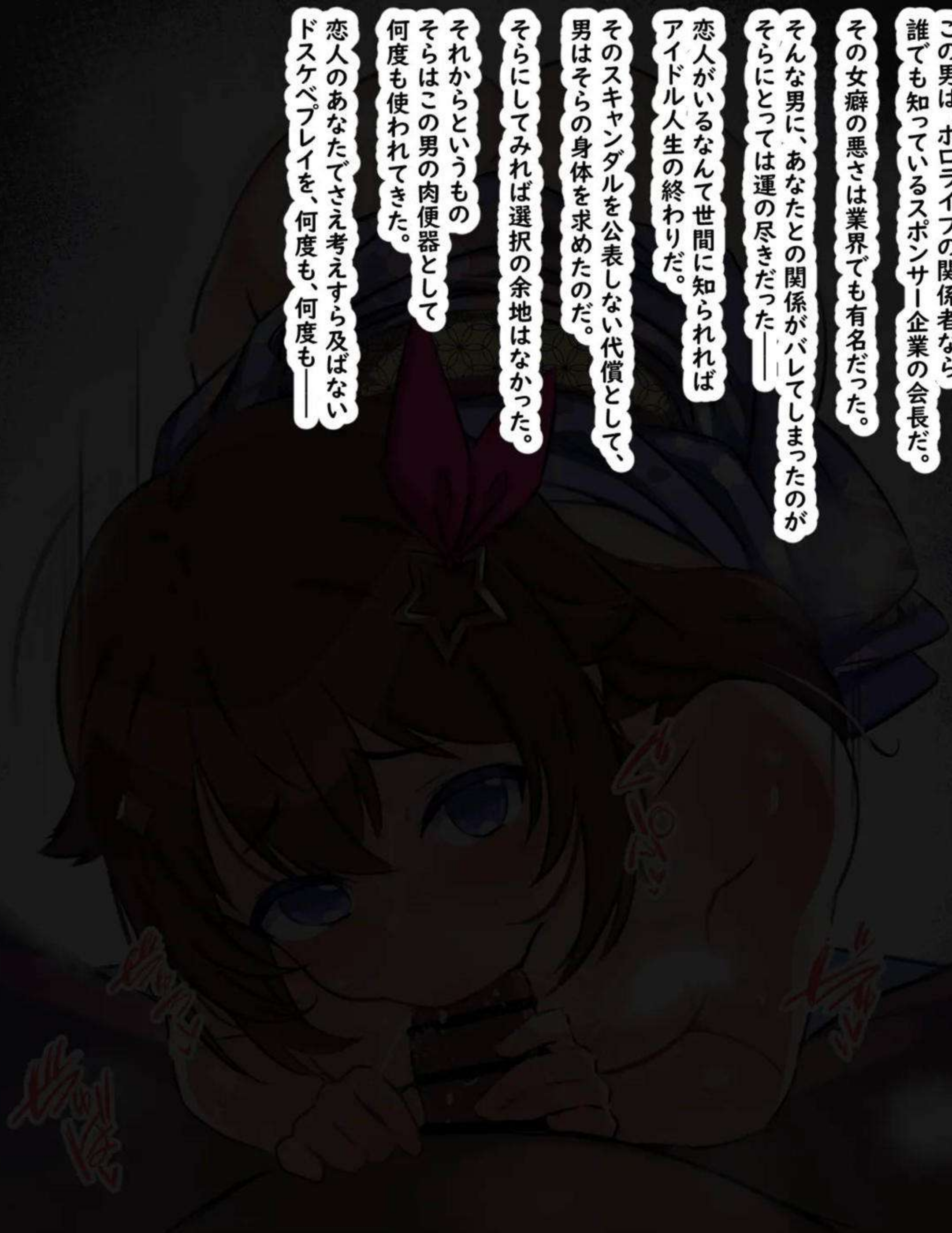
そのスキャンダルを公表しない代償として、男はそらの身体を求めたのだ。

そらにしてみれば選択の余地はなかった。

それからというもの

そらはこの男の肉便器として何度も使われてきた。

恋人のあなたでさえ考えすら及ばないドスケベプレイを、何度も、何度も――



「ン、れろ……♡
れろれろれろれろお♡」

「ぐふう、いいよお……」

あの綺麗な歌声を奏でるお口が、
チンカスマミれのちんぽを咥えているのを
見るだけで堪らんよ。

そうだ。

この光景も彼に送ってやろうか？
きっと喜ぶだろうなあw」

「ら、らめええ♡

他人棒しゃぶっている写真なんて見られたら
一発で浮気してるのバレちゃいますう……♡」



「ほうれ、次はこっちの穴を
可愛がつてやるぞお……」

「んおっ♡
ぶぶぶっといの入ってきちゃああああ♡」

あなたの粗末なペニスとは
比べ物にならない巨根が、
そらのおまんこを乱暴に犯す。

「どちゅん♡ どちゅん♡ どちゅん♡」と
男らしいダイナミックな腰振りに
そらの理性はたちまち溶けていく。

あなたはいつも、
暴発射精をしてしまわないようにと
怖気づいたピストンをしていたが、
そんな軟弱なオスとは生物としての根本から違っていた。

その残酷なまでの違いを
そらは今日まで嫌というほどに
思い知ってきた。



「どうだあ、そらちゃん？
彼氏のちんぽとワシのちんぽ
どっちがいい？」

「い、言えません、そんなこと……♡」

「ご主人様の命令だぞ？
それが聞けないなら、どうなるか……
わかるだろう？」

「ううう……♡
……の、が……
より……ですう♡」

「なんだって？ 聞こえんぞ？
もっと大きな声で言うんだ！」

ケツを引っ叩かれて、そらは「ひうううん♡」と鳴き声を上げた。

「ご、ご主人様のデカちんぽの方が♡」

彼の貧相なおちんちんより♡ 何百倍も気持ちいいですううう♡
血管バキバキの極太ちんぽで膣奥ごりごりされるの最高なおお♡」



「ぐふふうW
そうだろうそうだろうW
そらちゃんはここを突かれるのが大好きだから、な！」

「おほオオオオン♥
子宮口っ♥ 破れりゅうっ♥
こ、こんなレイプみたいなのセックスで
感じたくないのにいいい♥」

「ほれ、もっと鳴け！」

「んほおおおッ♥
おんっ♥ イ、イぐうっ♥
イぎまずうう♥ ご主人様の浮気ちゃんぽでえ♥
彼のおちんちんじゃできなかったガチアクメ決めちゃううう♥」
挿入から数分とかからず、
そらは派手にイキ潮をぶち撒けてアへ顔を晒した。
その顔も、その声も、あなたの知らないものだった。



「まったく、彼氏くんもだらしないねえ……
こんなザコまんこすら一度も本気でイカせることができなかったなんて
そらちゃんも大変だったろうw」

「ひゃ、ひゃい♥ そうなんです♥

いつも、彼がお射精するタイミングに合わせて

イク演技をしてて……♥

ずっと、セックスってそういうものだと思

ってたんです……で、でもお♥

ご主人様に初めて抱かれた瞬間、

全身に電気が走ったみたいになって……♥

こ、これが本物のおちんぽなんだって

思い知ったんです……♥」

「そんな情けない男のことが
まだ好きなのか？」

「そ、そ……そうです♥

わたしが愛しているのは、

彼だけです……♥」

その言葉は傍から聞いても
わかるほどに白々しかった。



「男女の関係を続けるうえで

身体の相性っていうのは大事だよお?

自分の女はしっかりちんぽで騎けておかないと

簡単に寝取られちゃうからね……今のそらちゃんみたいにW」

「そ、そんなことない♥

わたしは、脅されて……む、無理やり

相手させられてるだけ……だもん♥」

「こんなにおまんこ

締めつけながら言われてもねえ?」

「ああん違うのお♥

これはあ、身体が勝手にいい♥

ご、ご主人様のおちんぽ突っ込まれると

勝手に反応しちゃうんですう♥」

「それを世間じゃ

寝取られたっていうんだよW」

「ンほおおッ♥

おんっおんっおんっ♥」

そらの中に残った僅かな抵抗の意思は

圧倒的な快楽によって呆気なく消し飛んだ。



「そういえばそらちゃん、今日は危険日だったね？」

「そ、そうですう♡」

だからご主人様……

きよ、今日だけは種付け許してくださしい♡

お願いしますう♡

あ、赤ちゃんできちゃったら

もうアイドル続けられない……♡」

「そこは大丈夫さ。」

ワシがうまく手回しするから安心して孕みなさい」

「ああつてもおお♡」

彼がいるのに、他の人の子種で

妊娠するわけにはあ♡」

「大丈夫さw」

そらちゃんがワシの肉便器になってから

半年……まるで気づかない鈍感男なんだろう？

そんな奴は……そうだな、いいことを思いついたぞw

そらちゃん、耳を貸しなさい……」

ご主人様が、そらに向かって

悪魔のような計画を持ちかける。

そらは、その命令を拒むことが

できなかった。



「ご、ごめんなさい♡
あなたが淋しい思いをしてるだろうと
思っ、つい……い、嫌だったかな♡」

「そ、そっか♡よかった♡
と、ところで……
来週なんだけど……ンほおツ♡」

『ど、どうしたんだい？』

『え……そ、それって』

「うん♥
今日でできなかったこと……しよ
しばらくご無沙汰だった
そらまんこに……あ、あなたの
お精子、ちょうだい♥」

Love

「くくく……w
いいぞおそらちゃん、その調子だ。
彼を誘ってたっぷり
抱かれてくるといい。」

ガッ

「既成事実さえあればなんとでも
とぼけられるからねえ……
ワシらの子供は彼に面倒を見て
もらおうじゃないかw」





